

## 子どもたちから学んだこと

活動先：NPO 法人 ばお

### 1. 活動を通しての自分の成長と気づき

今回のサービスマーケティングの活動を通して、自分が成長したと思う部分は、相手が子どもだからといって意見などを押し付けない「フェアな関係で接すること」と、一人で考えるのではなく「相手と一緒に考えること」という部分だと考える。また、気づいたこととしては、不登校だから一箇所に留まるのではなく「たくさんの経験と人と接することが必要であり、大切なことなのではないか」ということである。

私が活動させていただいた「ばお」は、子ども、若者の育ちをサポートする市民活動団体であり、社会参加型フリースペースとして、不登校・ひきこもりの方への支援を行っている団体である。

「ばお」での活動期間中に接したのは、小学生から高校生の子どもたちであり、全員が自分より年下であった。「不登校」ということもあり、普段は自分が接する機会がない子どもたちだったため、最初はどのように接していけば良いのか分からず、ごちない接し方をしていたように感じる。

だが、「ばお」に来ている子どもたちは、一人一人が意思表示を行うこと、自分の考えを伝えることが出来る子どもたちであったため、非常に友好的で、一緒に体験を重ねるごとに仲良くなることができた。それに、うまくいかない時に少しの助言や手助けをすると、子どもたちは生き生きと活動をするようになったし、勉強をしていて間違えたこと納得のいかないことは「なぜ」「どうして」と理解できるまで聞いてきたりして、「大学生だから遠慮をしてしまう」ということがなく、また私も相手が「小学生・中学生だから」ということはなく、お互いに一緒に考えること・楽しむことができた。遊ぶときも一緒になって、思う存分遊ぶことが出来たし、「これがしたい・あれがしたい」という意見をお互いに言い合うことができた。

最初は「不登校の子どもたち」「大学生だから引っ張らなくてはいけない」という考えがあったのだが、こういった部分から「フェアな関係で接すること」「一緒に考えること」が出来たのではないかと考えている。

また、「ばお」ではボランティアや自然活動を行っているのだが、それらの活動に参加させてもらって思ったことは、子どもたちはたくさんの経験と人と接することが必要であり、大切なことなのではないかということである。

「ばお」の子どもたちは、養鶏作業で鶏の世話からたまごの出荷や、老人ホーム内にある喫茶店の手伝いをしたり、他団体と合同でスポーツや昼食作りを行っていたり、他にもたくさんの経験をしている。

たくさんの経験と人と接することは、子どもたちを大きく成長させる良い機会であるし、それぞれの活動をするときは「ばお」の部屋では見られないような表情をしていて、非常

に楽しそうであった。これは自分自身が体験して非常に強く感じたことである。このような機会は「ばお」の子どもたちだけでなく、相手側にとっても良い機会であることには違いない。だから、私は、人はたくさん経験と人と接することが必要であり、大切なことであると考えている。

また、活動を通して感じたのは、子どもの内面に向き合おうとしなかったり、子どもに対して否定的な見方をしてしまったりとすると、子どもはさらに心を閉ざしてしまうと考えられるので、子どもの主体性を大事にすること、子どもに関心をもち信頼すること、子どもの自発性を尊重することが非常に重要になってくるのだと感じた。

## 2. この活動を通して見えてきた地域活動や社会課題

この活動を通して見えてきた社会課題として、私は「不登校・ひきこもりの方のサポート活動をしている団体が少ないこと」を挙げる。

2009年度の文部科学省の学校基本調査で県内中学校の不登校生徒6,591人(前年度比216人増)と5年連続で増えていることが分かっている。この結果から不登校は、いまや平均してクラスに1名いるかいないかというほど、「当たり前」のようになってきているということが理解できる。だが、活動をするにあたって不登校支援を行っている団体などについて調べたが、地方にもよるが支援団体は多くはない。また、団体によっては設立者の偏った思想・信条に基づいて運営されているケースもあると、聞いたこともある。

大都市圏の支援団体が数多くあるような地域だとこれでもいいかもしれないが、他に支援団体が少ないため選択の余地がない地方都市だと困るだろう。

つまり、こうした偏った団体に頼るか、支援を諦めるかしかないということである。地方の数少ない、もしかすると1箇所しかないかもしれない支援団体がこうだと、利用する側としては困ってしまう。このように地方においては、ニート、ひきこもり、不登校の若者たちを対象にした民間の支援団体はなかなかなく、大変貴重である。その意味からも、この「ばお」の存在と活動は極めて重要であると考えている。

その一方、「地域の人や社会の理解がまだ不十分である」という課題があるのではないだろうか。これは、調べていくうちに私の住んでいる地域にも知らない支援団体があったことから考えるようになった点である。

社会復帰したくても出来ない人たちを周囲が支え、受け入れていくためにはどうすればよいのか。その答えを出すためには、まず私たち一人一人の理解が必要不可欠であると考えている。

最近引きこもりや不登校の数が増加しているので今回体験した「ばお」のような支援団体がより一層発展し、民間でしかできないノウハウを活かしてほしいと思う。また、支援団体が今以上に市民に受け入れられるような社会になってほしいと考える。